

平成30年6月25日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370379

研究課題名(和文) 20世紀ドイツ文学におけるスターリニズムの伝統の研究

研究課題名(英文) Stalinism in the German literature of the 20th century

研究代表者

西岡 あかね(秋元あかね)(Nishioka, Akane)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：30552335

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：両大戦間のドイツにおける左派の急進的文学、及び建国から1956年の雪解けに至るまでのドイツ民主共和国の文学の中で、綱領的な人間像が次第に全体主義的な個人崇拜のイメージに結びついてゆく様子を、アヴァンギャルド研究及び全体主義芸術研究の文脈において分析した。具体的には、表現主義以降、ドイツのアヴァンギャルドが好んで用いた「新しい人間」のモチーフが生み出す多彩な表象に注目すると共に、この形象が1920年代以降、次第に政治化されていくプロセスを個別作品の分析をもとに論じた。

研究成果の概要(英文)：This project was aimed at analyzing various images created from a typical German avant-garde literary figure of "Neuer Mensch" in the context of avant-garde studies and totalitarian art studies.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ドイツ文学 表現主義 アヴァンギャルド研究 全体主義研究 プロレタリア文学 東ドイツ文学

1. 研究開始当初の背景

本研究で取り扱う、表現主義における「新しい人間」像の研究は博士論文にまでさかのぼる。そこで私は、初期表現主義の作家達の作品において言語表現の刷新が人間像の理念的革新と連動している様を論じた。その後、博士論文では専らテキスト分析的に論じた、表現主義における人間像の刷新が、その「運動体」としての芸術実践の前提になっていることに気づき、表現主義における組織的芸術活動の諸相について調べ始めた。その際、運動体としての表現主義の発展プロセスの中で、声を発する「詩人」、「演説者」といった形象にプログラムの意味が付与された結果、この形象が表現主義運動の行動主義を象徴する指導者像にまで高められているケースが浮かび上がってきた。また、この様な詩人像の政治化と並行して、表現主義のサブカルチャー的な運動形態がある種の個人崇拜を生み出している点にも注目した。この研究によって、表現主義文学の美学的特徴は、その運動体としての行動主義的傾向と本質的に連動していることが確認できた。しかし、従来の研究では、表現主義運動の実践的側面と政治性については専ら、いわゆる「政治的表現主義」の作家の綱領的テキストに即して、その思想的傾向が語られるにとどまっていた。更に、これらの作家の作品が美学的には価値が低いと見なされることで、表現主義の文学テキストと表現主義運動の政治性は切り離して考察されることが多く、両者の根本的なつながりに踏み込んだ研究はこれまでほとんどなかった。

この研究上の空白を埋めるため、政治的表現主義の代表的作家で後に共産主義者となった詩人ヨハネス・ベッヒャーに焦点を合わせ、彼の表現主義期の詩作と左傾後の作品の連続性に注目しつつ研究を進めた。その結果、表現主義期の作品における行動的詩人像と、後のモニュメンタルなレーニン像や労働者像には、未来派的言語構造やアジテーション効果

において共通性が見られることが分かった。そこで、この点を掘り下げ、左傾化したドイツの前衛芸術運動が、ロシアの革命文学やプロレトクリト、更にはその後のスターリニズムの文化伝統とどのような関係を有しているかを調べ始めた。その際、同時代の西欧諸国の作家達によって書かれた、革命後のソヴィエト国家を賛美する詩文も比較の対象として参照したが、その結果、アヴァンギャルドの文学的表現や芸術理念が地理的枠を超えてソ連型の全体主義的文化に取り込まれる形で、一種の国際的スタイルが成立しているのではないかと考えるに至った。

そこで、かねてより関心のあった、アヴァンギャルドと全体主義の関係というテーマを織り込む形でこの問題を論じることとし、本研究の最初の構想を立てた。当初は、左傾化したアヴァンギャルドとソヴィエト型の全体主義文化との関係のみを念頭に置いていた。しかし、研究のための理論的基盤を得るためにグロムシトクの包括的研究『全体主義芸術』(貝沢哉訳、水声社、2007年)で展開されている議論を検討した結果、全体主義的文化伝統は個々のイデオロギーを超えた共通のスタイルを持っているため、右派・左派、あるいは保守・革新という区別は意味をなさないのではないかという疑問を持つに至った。実際、近年研究が進みつつある第三帝国の芸術は、スターリン体制下の社会主義リアリズムと様式的に驚くほど似ている。政治体制論の枠組みでは「スターリニズム体制下の文学」と「ファシズム体制下の文学」の様相はそれぞれ区別して論じるべきものと仮定できるが、「スターリニズムの文学」と「ファシズムの文学」はどうであろうか。グロムシトクのモデルに従うと、この両者は共に、統一的スタイルとしての「全体主義芸術」の一現象と捉えられるのだが、この様な見方は妥当だろうか。更に、グロムシトクは「国際的スタイル」としての全体主義を強調するため、全体主義文化

が展開されたエリアごとの差異の存在は最初から否定しているが、この前提は妥当だろうか。特に、ロシアと並んでドイツは他の西欧諸国に比して全体主義的伝統が強かったと言えるが、その理由として、なんらかのエリア特有の文化的背景があったのではないだろうか。スターリニズムとの関連でいえば、1920年代のドイツには当時ヨーロッパで最も強固な共産党組織があり、芸術家の組織化も進んでいた。こうした状況とファシズムの勃興に対する危機感を背景に、急進的芸術家によって、文化・生活様式の理想としての「ソヴィエト」像や「ソヴィエト的人間」像が形成されたが、そのプロセスは単なる模倣を超えた、「ソ連モデル」への独自のアプローチ法を含んでいるのではないだろうか。このように、エリアの特異性へ目を向けることで、本研究は、従来行われてきた全体主義芸術の包括的記述に個別研究の視点を取り入れ、これまであまりにもプロトタイプ的に語られる事が多かった、この20世紀を代表する芸術スタイルに対するエリア独自の解釈を問題とし、この研究領域に新たな視座を提供するものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、両大戦間のドイツにおける左派の急進的文学、及び建国から1956年の雪解けに至るまでのドイツ民主共和国(DDR)の文学における人間像と個人崇拜がどのような文化的、思想的、社会的背景のもとで現れたかを示し、その多様なイメージと表現上の構造、特質を全体主義芸術研究の文脈において分析することで、20世紀のドイツ文学におけるスターリニズム的傾向の発生と発展経路を明らかにすることにある。具体的には、表現主義をはじめとする前衛芸術運動の中で生まれた「新しい人間」像が、ワイマール期のプロレタリアート文学に継承され、ソヴィエト体制のプロパガンダ装置に取り込まれてゆく

過程を検証したい。

以上にその骨子を述べたように、本研究は、「新しい人間」像と個人崇拜という二つのアスペクトを手掛かりとして、20世紀前半のドイツにおける前衛的な左派の文学、および建国期のDDR文学におけるスターリニズムの伝統に光を当てようとするものだが、研究を進める際、特に重点的に論じられるべき疑問点として、以下の諸点があげられる。

表現主義やダダといった前衛芸術運動が展開されるプロセスで、指導的役割を果たした詩人や芸術家の姿が特定のタイプとして象徴化される傾向があるが、この表現傾向とスターリニズムの特徴的文化現象である個人崇拜には何らかの連続性があるのか。

アヴァンギャルドの文学・芸術が提起した「新しい人間」の創造という理念が、後に、様々な変形を施されつつ、スターリニズム体制下の全体主義的文化に取り込まれてゆく過程で、どのような美学的な、あるいは芸術実践上の変化がおこったのか。

全体主義のイデオロギーにおけるイメージの先行は、芸術における図像的なものの優勢と対応しているが、この図像的表現への志向が文学においてはいかなる現れ方をしているのか。

上述の三点と関連して、アヴァンギャルドの諸流派の芸術的構造や、美学的理念の中には、独裁体制の確立を支援し、全体主義的文化への取り込みを可能にするような種の思想的要素が含まれているのかという問題。

上述の様に、本研究は、スターリニズムに代表される全体主義的芸術スタイルが、20世紀のドイツにおける急進的左派文学の諸潮流の中でどのような文学的表現を見出したか、また、どのような文化現象を生んだかを明らかにすることで、従来は美術史の分野を中心に進められてきた全体主義芸術研究に、ドイツ文学研究の視点から新たな知見を提供しよ

うとしている。また、その際、全体主義体制下の文学ではなく、全体主義の文学といえるスタイルが、先行する前衛的文学の諸潮流を取り込み、変形する形で形成されてゆく過程に注目することで、全体主義とアヴァンギャルドの関係という、いまだに異論の多い文学史・芸術史上の問題にも答えたい。

3. 研究の方法

本研究は、通時的に大きく三部に分けて考察を進める。第一部では、20世紀初頭のドイツにおける前衛芸術運動の中で生まれた「新しい人間」のモチーフや詩人像が次第に政治化され、初期のプロレトクリト運動の中でプロトタイプ化してゆく様子を論じる。第二部では、初期のプロレトクリトが20年代後半以降、組織化された「党の芸術」へと転換される過程で、プロトタイプ化された人間像がどのようなイデオロギー的機能を獲得してゆくか、また、それが個人崇拜の文学的表現にどのような影響を与えたかを明らかにする。第三部では、建国期のDDRにおいて、体制的にはソ連型のモデルが移入される中、文学や芸術において「もう一つのドイツ」にどのような理想的イメージが投影されていたのかを、ベッヒャーのケースを通じて考察したい。

上述のアウトラインに従い、本研究は以下の手順で進める。研究の第一部と第二部で取り扱うテーマは連動しているため、以下、個別研究の対象となるテーマごとに、第一部と第二部の研究課題をまとめて記述する。

a-1 「新しい人間」像の変化：表現主義の「新しい人間」像は本来、宗教的・形而上的性格の強い抽象的なモチーフであったが、ダダにまでつながる運動の急進化と共に、労働者など具体的な人間像が「新しい人間」のタイプとして前面に押し出されるようになる。ここではまず、政治的表現主義の作家の諸作品を分析し、当該モチーフの変遷をたどる。

a-2 このモチーフの変化は従来、様式的観点からも、リアリズム路線への転換とみなされることが多かったが、当初のモチーフを特徴づけていた宗教的性格は姿を変えて生き残り、1920年代後半以降の、ソヴィエトを題材とする文学におけるカルト的な労働者像にも何らかの形で引き継がれているように思われる。ここではこの問題を、ベッヒャーの初期作品とワーマール期の作品を比較しつつ、考察したい。

a-3 詩人像の政治化：この点については研究目的でもふれた。ここでは、上述の二点と関連して、政治化された詩人像が「新しい人間像」に取り込まれる、あるいはそのプロトタイプとなる様子を、表現主義からプロレタリア文学に移行した詩人の作品に即してみてゆく。また、左派芸術家の組織化が進む過程で、詩人の社会的機能が再定義されてゆくが、それによって、政治化した詩人像にどの程度質的变化が見られるかも合わせて考察する。

b 個人崇拜の表現：スターリニズムの特徴的文化現象である個人崇拜の表象は、アヴァンギャルドの「新しい人間」像が指導者崇拜と結びつくことで極限的に肥大したものだといえる。このカテゴリーの作品は、ロシアのみならず、30年代から40年代にかけて、ソヴィエト・ロシアに共感する西欧の作家達によっておびただしい数が書かれた。これらの作品を同一の「型」とみなし、個別に注意を払う必要はないとする見方も存在するが、私はここで、特にドイツ語圏におけるスターリン崇拜の文学を言語表現のレベルで分析することで、(a)で論じたアヴァンギャルドの文学表現がどのような形でこの全体主義的文学表象に取り込まれているのか、また、ドイツ語圏の文学的伝統からの独自の影響がどの程度見られるのかを明らかにしたい。

c (b)と関連して、なぜ同時代のドイツの作家達がスターリンという人物表象や、彼によって象徴されるソヴィエト国家にこれほどまで

に熱狂したのか、どのようなファンタジーがそこに投影されていたのかが問われる必要がある。この点を明らかにするため、20世紀初頭のドイツ文学における「ロシア」ブームを踏まえ、そこで形成された一種のプリミティヴィズム的ロシア像が、30年代に書かれたソヴィエト紀行にどの程度影響を与えているかを分析することで、ドイツ文学における伝統的ロシア・イメージが、スターリニズムの文化現象のドイツへの伝播に与えた影響を考察する。

第三部で問題となる、DDR 建国期にソ連モデルの政治・文化体制が移入された際に文学が果たした役割は、本研究の枠を超え出るような、それ自体が独立した大きなテーマである。従って、本論ではこの問題を包括的に取り扱うことはせず、第一部と第二部で行った考察を補完するため、主にベッヒャーの亡命期と晩年の作品を例に、アヴァンギャルドから受け継いだ現実改革と「新しい人間」の創造の基本理念が、新しい「もう一つのドイツ」の文化というプログラムに再編される様を論じたい。あわせて、1950年代に東ドイツで発表された、おびただしい数のスターリン賛歌のアンソロジーを例に、スターリニズムの文学表象が、戦後ドイツへのソ連モデルの伝播に際して果たした役割を検証したい。

4. 研究成果

2014年度はまず、本研究プロジェクトを遂行するための準備作業となる、全体主義およびスターリニズムに関する最新の研究を検討した。この研究分野は従来、主に政治体制論の場で行われており、グロムシトクの包括的研究のように、芸術様式や文化現象としての全体主義を問題としたものは少ない。しかし、個別研究には、この視点からスターリニズムを扱ったものも存在する。これらの先行研究を再度批判、検討することで、本研究の理論

的基盤を強化する事を目的として、マールバッハ・ドイツ文学文書館で研究資料の調査と分析を行った。

マールバッハでの調査と並行して、スターリニズム的文学伝統成立の前段階として、ワイマール期の急進的左派文学の研究を進めた。具体的には、プロレタリア文学の左傾化に伴う国際的前衛イメージの形成過程に注目した。その際、特に、イメージ形成過程の地域的特性を明らかにすることで、インターナショナルスタイルの地域性という、本研究の中心テーマに関する考察を深めた。この研究成果を織り込む形で、すでに進めていたジョージ・グロスの受容に関する論文を完成し、発表した。

また、個別研究の分野では、ワイマール期の左派文学におけるソヴィエト・イメージに注目したが、この分野は近年、研究が盛んになっており、資料も紀行文学やルポルタージュ文学を中心に多岐にわたる。大まかな考察の結果、初期のプリミティヴィズム的形象がアメリカニズムの影響を受けた超近代的未来イメージに転換してゆく傾向が見られたが、資料の多彩さに鑑みても、そのような単純な図式化は危険であり、詳細なテキスト分析は2015年度以降の課題とした。また、この研究過程で注目したアヴァンギャルドの超近代的未来イメージの中に、典型的な形で表れているモダニズムのスペクタクル性について、表現主義を例に、「第一次世界大戦と日本モダニティの変容」をテーマとする日本比較文学会のシンポジウムで発表を行った。

2015年度は研究の前提となる大枠のモチーフ研究をまず行った、具体的には、個人崇拜(スターリン崇拜)の文学的表現についての考察を進めた。ドイツにおけるこの文学的現象については、ジャーナリスティックな関心の対象になることはあっても、テキスト分析や文学史研究の対象にはあまりなっていなかった。体制としてのスターリニズムと文学の関

係に関する、雑誌『テキストと批評』シリーズの特集「文学とスターリニズム」(ミュンヘン、1990)など、個別のアスペクトを論じた論集がいくつかあるに過ぎない。そこで、まずは個人崇拜の文学的表現のルーツとなる、アヴァンギャルドの文学における「新しい人間」像の表現に焦点を当てて研究を行い、その結果を国内で開催されたシンポジウムで発表した。また、プロレタリア芸術におけるスターリン崇拜の文学的・美術的表現についても、既に収集した資料を基に分析を進めた。

2016年度は、体調不良のために研究の遂行が困難となり、研究の一時中断を余儀なくされた。そのため、補助事業期間の延長を申請し、これが受理・承認された。

2017年度は、2015年度の後半に集中的に行っていたモチーフ研究を継続する形で研究を再開した。具体的には、表現主義と1920年代の左傾したアヴァンギャルド(プロレタリア文学運動)における詩人像と政治化した「新しい人間像」がどのように連続しているのか、また両者の間にどのような変化が見られるかを個別の作品分析を通じて考察した。特に、表現主義に特徴的な「声をあげる詩人」や発話のモチーフに注目し、このモチーフがアヴァンギャルドの政治化の過程で変質し、超個人主義的な詩人像から政治的指導者の個人崇拜の表現へと変化してゆく様子を明らかにした。この研究成果の一部は東京外国語大学総合文化研究所の機関誌『総合文化研究』に発表した。

上述の研究を発展させる形で、建国期のDDRの文学における個人崇拜(具体的にはスターリン崇拜)の表現の調査研究を進めた。まずは20年代以降の左派アヴァンギャルドにルーツを持つベッヒャーやブレヒトのような詩人を対象として、彼らの亡命時代と戦後の作品の分析を行った。この研究成果については現在、論文の形にまとめる作業を行っており、来年度以降に発表を予定している。それと同

時に、部分的には亡命文学・抵抗文学とのかかわりを持つ1910年代生まれの世代の作家や、1920年代生まれの世代の作家の作品も視野に入れ、多様な文学的・文化的背景を持つ彼らの作品の中で、部分的には20年代以降の左派アヴァンギャルドによって準備された詩的言語を受け継ぎつつ、どの様な個人崇拜の文学的表現が生まれているか、またそれがDDR建国にまつわる反ファシズム神話の成立とどの様にかかわっているかを考察した。この問題については東ドイツ文学研究の文脈で現在も継続して研究を進めており、今後さらにテーマを新しい枠組みの中で深化させたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

1. 西岡あかね「歌う詩人 ヴェーデキント、クラウス、ブレヒト、ピーアマン」、『総合文化研究』第21巻、2018年、86-103頁(査読なし)。

〔学会発表〕(計2件)

1. 西岡あかね「大正期におけるドイツ表現主義受容」、日本比較文学会第52回東京大会、シンポジウム「第一次世界大戦と日本モダニティの変容」、2014年10月11日、二松學舎大学(東京)。

2. 西岡あかね「第一次世界大戦の技術体験と「新しい人間」像の変容」、シンポジウム「臨界のメディアとアヴァンギャルドの知覚」、2016年3月8日、東京外国語大学(東京)。

〔図書〕(計1件)

1. Yuichi Kimura / Thomas Pekar (編) : Kulturkontakte, Transcript (Bielefeld)、2015年、(西岡あかね 担当箇所) 267-290頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西岡 あかね (NISHIOKA AKANE)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授
研究者番号：30552335